

北野町の異人館訪問

小林 秀雄氏邸

秋雨の坂道を登りつめて、北野町の小林邸の門を入ると、目印の楠の大木が二本立っています。車まわしの広場の棕櫚の植込の側には十三重の石塔が又目をひくがえすと庭の隅にどっしりとした朝鮮灯籠が置かれている。白ペンキの独逸下見板張の外壁をまわりこむと、南側に美しく刈り込まれた桜が植えられ、鶴卵大の白い玉石が敷詰められ、雨にうたれて光っています。大きなガラリの両開扉を入れると玄関です。ステンドグラスの欄間と、緑青の平安調のランタンが天井から下り、これが奇妙に調和しています。玄関ホールから左手にある客間にいると、良く手に入りいきといた古いが、びくともしていないサクラの椅子が置かれ、部屋の正面がベイウインドに入っています。壁には一五〇号ぐらいいの浜辺の生活と大阪湾を描いた横長の日本画がスタンウェイのグランドピアノの後に掛っています。

数のお手伝さんが住まれた賑やかな生活が想像できます。小林氏は大正一四年に、ロンドン・スクール・オブ・エコノミック（L·S·E）に留学なさり、良き時代の英国の生活を経験し、完全にこの洋館の住いに合った生活をなさっています。神戸に住むならば一度は北野町の山際の港の見える異人館で生活してみたいと思いますが、完全に洋式化した、ホテルの様な生活は仲々出来ないものです。

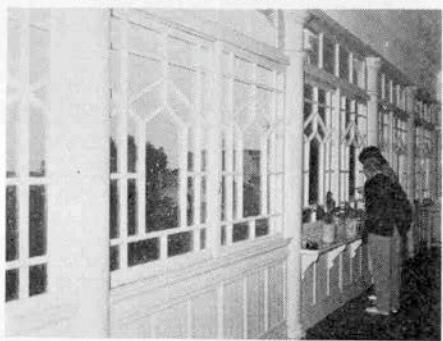


小林さんご夫妻

す。部屋隅には小さいがしつかりとした暖炉が組込まれ、高いしつく塗の天井がカーブを切つて壁に落ちて来て薄緑のベンキ塗の腰板から大きな巾木を介して、黒檀の縁どりのある寄木張の床はワックスで磨き込まれています。しばらくすると白髪の小林氏が出でいらっしゃいました。現在では奥様と家政婦さんの三人暮しで大きな屋敷にしては少し寂しいのですが、かつては五人の子供達と多くは、やはり住いと住人が一体となり、生活がなされ、初めて生きた住いになると思ひます。客間の向いのダイニングルームにはサクランボのダイニングセットと応接セットが置かれ、仏製エラールの燭台の付いたピアノは、チエンバロに似た甘い音色を出します。ピアノはやはり広くて、天井の高い部屋で弾き、聞くと又一段と良いものです。壁には英國をしのばせるビックベンの銅のエッチングや、L·S·Eの真鍮のワッペンが掛り、背の高い窓やがつちりと大きな扉のせり出の櫛や柱の彫物に西洋の古き良き時代への郷愁が込められています。めずらしいスコットランドのリキュールを御馳走になり、しかも2階のリビングルームやベットルームそれに眺望の良いサンルーム等を丁寧に案内していただきました。ほのぼのとしたこの住いがいつまでも生き続けることを心から望んでいます。



小林氏邸の応接間、左が武田レポーター



サンルーム、昔はここから港が見えた



小林氏自室、L・E・S時代の写真が飾ってある
左：小林秀雄邸前面

明治の英國 が息づく

六甲山の坂野家別荘

赤レンガを、がつしり積み上げたマントルピース。

アイルランドの原野を走る野牛の群れを描いた三十号のエッチングが、その上の壁を占める。

まわりには四枚羽の黒く古めかしい扇風機、同じく古風な柱時計。中央には灯油ランプ…。

今様にいえば4LDKの、ダイニングに当たる部分に、そんな舞台装置が生きている。

「終戦直後、もう五年しかもたない、つていわれたんですよ。それが、つぶれもせずに三十年もたつてしまつて……」

夫人の、坂野博子さんは、その調度品の一つひとつに愛着をこめて紹介して下さる。

「明治の英國」が、そのままここに生き残っている、ともいえそうだ。

ダイニングをはさんで、ベッドルームが二つずつ。その四室は、ダイニングのランプが天窓を通して光を送る。

ベランダ風のサンルームには、茶に変色した籐椅子が並らんでいる。ふろは鉄のカマの、いわゆる呼ばれている。



左上にランプがみえるダイニングルーム

夏一家は、おもにここで過ごす。にぎにぎしく下界をみおるす、という山荘ではない。深い杉木立に囲まれて、ゆつたりと静かな時間を持たのしむ。いかにも、そういう感じの構えである。

銀行家だった坂野通夫さん（アーヴィング社長）の父親が、英国人アーサ氏からこの別荘を買いうけたのは大正九年。六甲山頂が開発されて、まだ何年もたつていなかつたときだ。

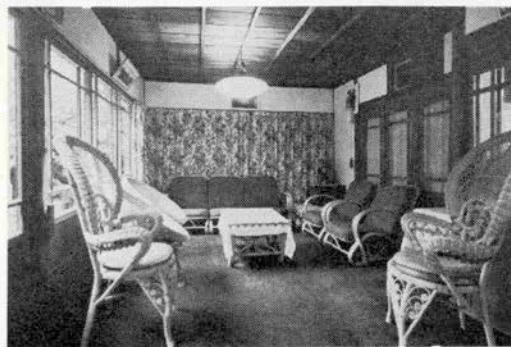
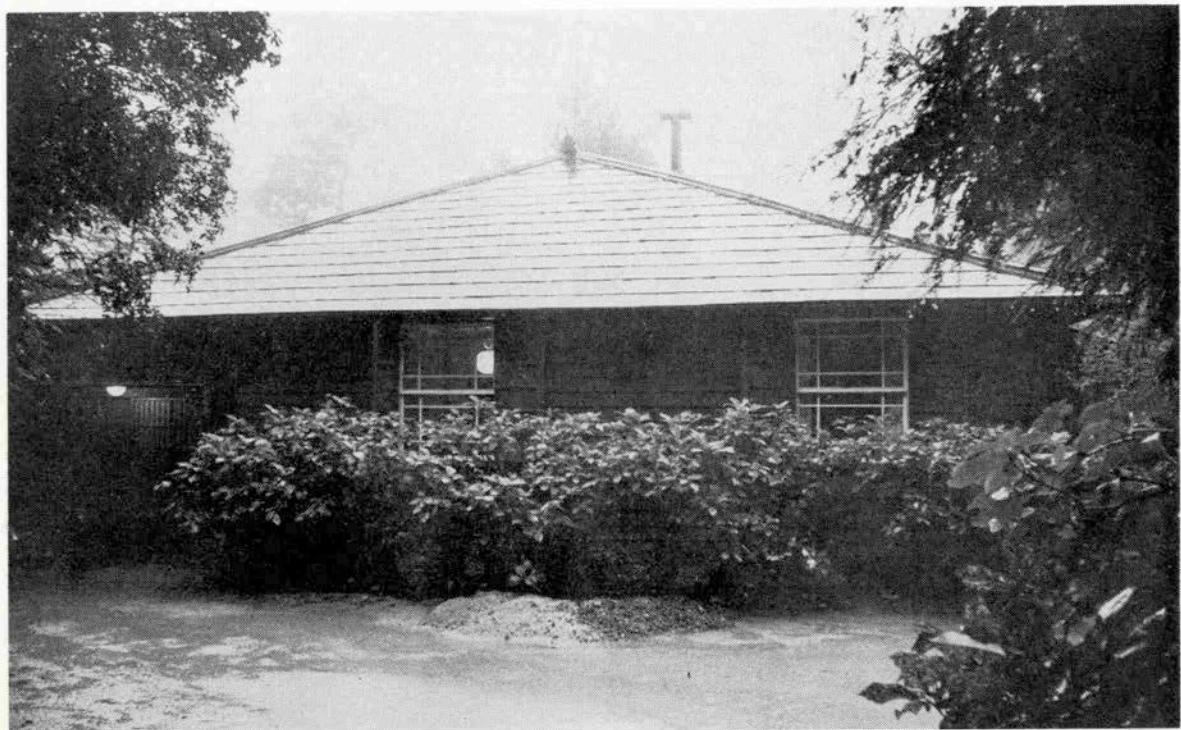
「ムダは排すべきだが、第三者にも恩恵を及ぼすぜいたくはよろしい」という博子さんの実家の家風もまた、ここに生きているようだ。

二代にわたった植林の成果が、三千坪の敷地をおおっている。杉は、もう人ひとりでは抱えきれないほどの成長をみせていく。

「こんなところも空襲でやられましてねえ、焼夷弾を十七発も受けたんですよ」

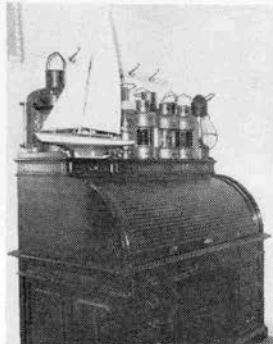
その焦げた跡をベランダに見た。戦後、引揚げてきた通夫さんが、休みごとに通つて、修復したのだという。

異国趣味、そして年輪。いや、なによりも貴重なのは、住むひとの愛情だろう。われわれ庶民からみれば、別荘などはぜいたくあまりないシロモノだが、ここにはそういう反感を寄せつけない暖かさ、素朴さがあふれていて思えてならなかつた。

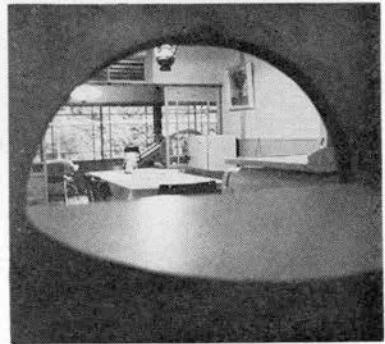


上：あじさいに囲まれた山荘全景

広いベランダに籐椅子が



古いキャビネット型机とご主人のコレクションの一部



英国人は膜が厳しかった。お手伝いさんはここまでしか入れない

モダンと 大地の調和

中西勝邸を訪ねて

「白い壁の外観はやはり、モロッコ風ということですか」と尋ねたら、画伯は「そんなん違う、最初は壁面は手焼の練瓦でビックリやると思うたんやが、諸物価の値上がりで、白いままでなったんや」その白壁に車輪が埋めてある。その白壁のところの緑色、あれは自慢の作品やデ「これが出窓の飾り。こういった調子のものが、位置がいいのか、ピタリときまつているから不思議だ。

バルコニー風の屋根のところに形のいい「すすき」が生えていた。家を建て替えようと覚悟をきめたのが四八年四月。竣工したのが四九年四月。つまり一年がかりで完成したという。

設計は、画伯の弟子である佐川満男の兄である佐川俊吉氏のもの。そして、建築中に中西ご夫妻はモロッコに行ってしまった。そ

して、海外から「あの柱をはずして、あそこはこうなおして」という度に設計図を書きなおさねばならなかつた」と伝え聞く。

「まあ、この家は、僕とお咲の思いどうりにつくつたんや」

それはそうだろうと思う。が、佐川さんの困つたような顔が浮んでおかしかつた。

まさに豪放磊落、のよう見ええがそうでない。どことなく神経がピリピリするような構えがあ

「あれはナ。大八車の車輪や」なるほど。「あの黒いシャベルとその帶のところの緑色、あれは自慢の作品やデ」これが出窓の飾り。



居間で、中西画伯

とにかく家の中心には、モロッコ、スペイン、アフガニスタンなどの陶器が、中西好みのものが並べられている。

「何に、僕はなあ、キッチン整理してあるというのは、何んとしても絶えられん性分なんや」確かに、いろいろな空間に遊びがたっぷりとりこまれている。

しかし、空調器具は黒い木の飾り棚でおおわれ、そこには、小物

のコレクションがいっぱい並べられていて、絶対気がつかないようになつていた。

「居間は出来るだけ天井を高くとつてあるんや、この方が落ちつくからナ」

「それにもしても、分厚い、丈夫な綿縫です」といつたら、

「どうや、これがモロッコで出来るんや、凄い模様やろ」

それこそ、手織りの重みのある色調とデザインの綿縫である。そ

して居間という居間には、モロッコ製の綿縫が敷きつめられ、しつくりした落ちついた調子である。

「ああ、うちで一番ええのは便所や、このタイルはポルトガルの手づりや、ええ色やなあ」

この中西邸母家に趣きを異にした部屋が二つある。咲子夫人のお部屋である。この部屋はキッチンと綺麗になつてゐるのですぐ判る。

とにかく、家全体が美術作品で埋められている。美術品ではない。あらゆるスペースが中西画伯の作品なのだろう。二階の部屋からの眺望はすばらしい。灘五郷を見下ろす、鴨子ヶ原の高台のいいところなのだ。母屋の外にアトリエと

画伯が誇る自称、民俗資料博物館のある和室「無字庵」がある。



中西邸全景



緑が美しい玄関アプローチ



ご自慢のトイレ



2階和室で一弦琴を楽しむ咲子夫人



なぜか太鼓などがある別棟のアトリエ

KOBE & MY LIFE

近代的な
木造建築

ジェームス山の高田邸

塩屋駅の山手に「ジェームズ山」

とよばれる小高い丘がある。

かつて、イギリス人ウイリアム・ジェームズ氏が戦争で得た巨万の富をつぎこんで開拓し、現在は外国人たちの豪華な住宅が立並ぶエキゾチックな雰囲気につつまれている。ここからの明石海峡の眺望は抜群によく、私の住んでいる須磨の高倉台からはそう遠くないの、天気のよい日などはよくここに足を運ぶ。

このジェームズ山のすぐ下にこの春完成した高田忍邸がある。

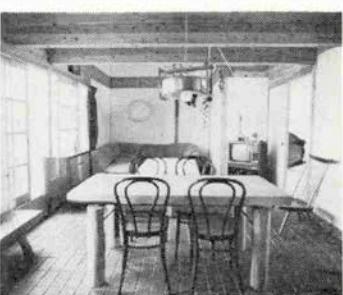
外観が木材で格子のように囲まれているので一見奇異な感じを受ける。玄関のトビラを開けて中に入れていたたと、一瞬ブーンと木の香りが鼻をついて快よい。それもそのはず、この高田さんのお宅は家屋全体が木材をむき出しのまま使っており、山や高原のロッヂのような感じである。

設計は神戸の「都市・計画・設計

研究所」と四国の「山本長水建築事務所」が共同で設計し、昨年十一月に着工、今年の三月末に完成了。何でもこの家屋の基調をなしている木材は、わざわざ四国から切り出し、二カ月ほど乾燥させてから神戸までもってき組み立てたそうだ。今ハヤリの新建材は一切使用せず、すべてポンモノの木を素材につくられている家など今どきめったにないだろう。

さぞ高くついただろうに、と余りに思ふが、実際は高価なだけだ。建築家が頭の中で描いた奇抜な家というものは、そこで毎日寝起きして生活するものにとってはかならずしも便利で暮しやすい家とはいえない場合もあるが、半年暮してみて高田さんは「まあまあです。夏は涼しかったけれども冬はどうでしょうね。壁が全部木材なので温かい気はしますけど」とまずまずの感想。

「都市住宅 一九七五夏号」にこの高田さんの住宅が紹介されており、そこに「この住宅のテーマは△木▼をとおして、住まいと町並みと山を交流させることにあります」とある。



一階ダイニングルーム

がミックスされているところがおもしろい。

室内のインテリアも民芸調の家具があれば、現代風の照明器具ありで、それぞれの部屋のファンイキや構造で変えている。

「よくまあこんなおうちをつくら

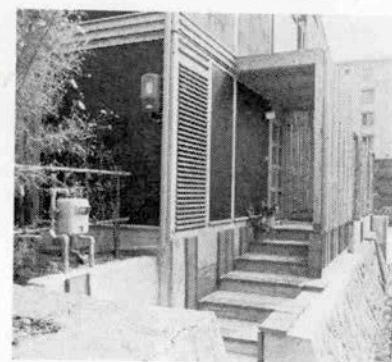
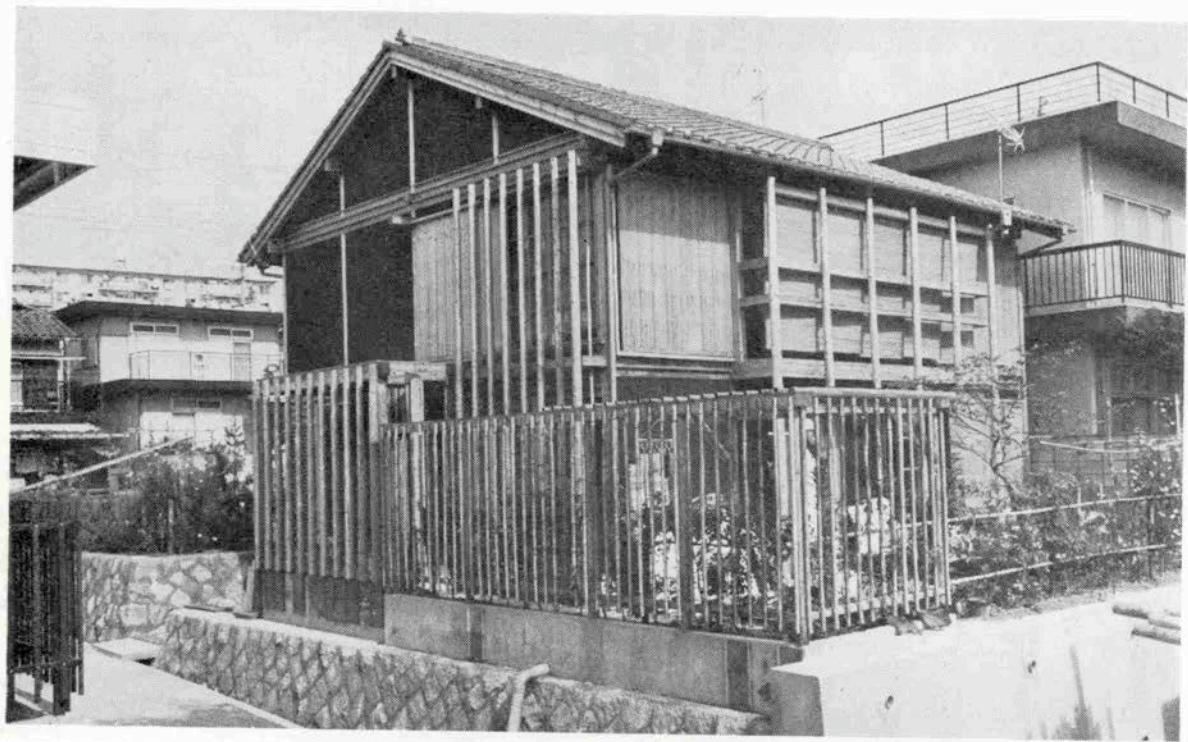
れましたね」とよくいわれるそうだ。建築家が頭の中で描いた奇抜な家というものは、そこで毎日寝起きして生活するものにとってはかならずしも便利で暮しやすい家とはいえない場合もあるが、半年暮してみて高田さんは「まあまあです。夏は涼しかったけれども冬はどうでしょうね。壁が全部木材なので温かい気はしますけど」とまずまずの感想。

このネライが成功したかどうかは私にはわからないが、コンクリート文明にひたりきつて現代人の一人である私には、久しぶりに木の感触と香りが何ともいえずく感じられる。家屋の構造は何となく京都や飛騨の高山の古い家の建築に似ているが、レンガの床がモダンな感じを出しており、純日本風な様式の中にも近代的な感覚

た。

橋本 明（社）家庭護養促進協会事務局

長▽



上：高田邸全景

ふきぬけから見た居間

白木がきれいな天井と変わった電気の笠

玄関は竹の覆いで囲まれている

KOBE & MY LIFE

すまい手の表現

石阪春生邸を訪ねて

一つの敷地の中に各々が、別棟となつていて今時、街中には優雅なすまい方である。御両親のすまいる母屋、倉を改造したアトリエとサロン、そのまま出番を待つている倉、そして新しく増改築されたすまい。今回拝見出来たのは、アトリエとそれに附属するサロンです。写真を見るように白壁に濃い木肌のとりあわせ、小屋組を見せた高い天井、骨どうもの椅子や、自らデザインして造られた飾り棚、そこ、ここに置かれてるじのすみずみまでゆきわたつた美意識の世界が感じられます。どれもこれも、なにか懐しく暖かいそう、ふるさとみたいなもの、人々の手アカのしみついたようなモノ、クラシックな様式美、そして今や民芸調と呼ばれる日本の造り、それは誰もが持っているふる里願望をくすぐるに充分です。しかしこれを即まねすることは出来

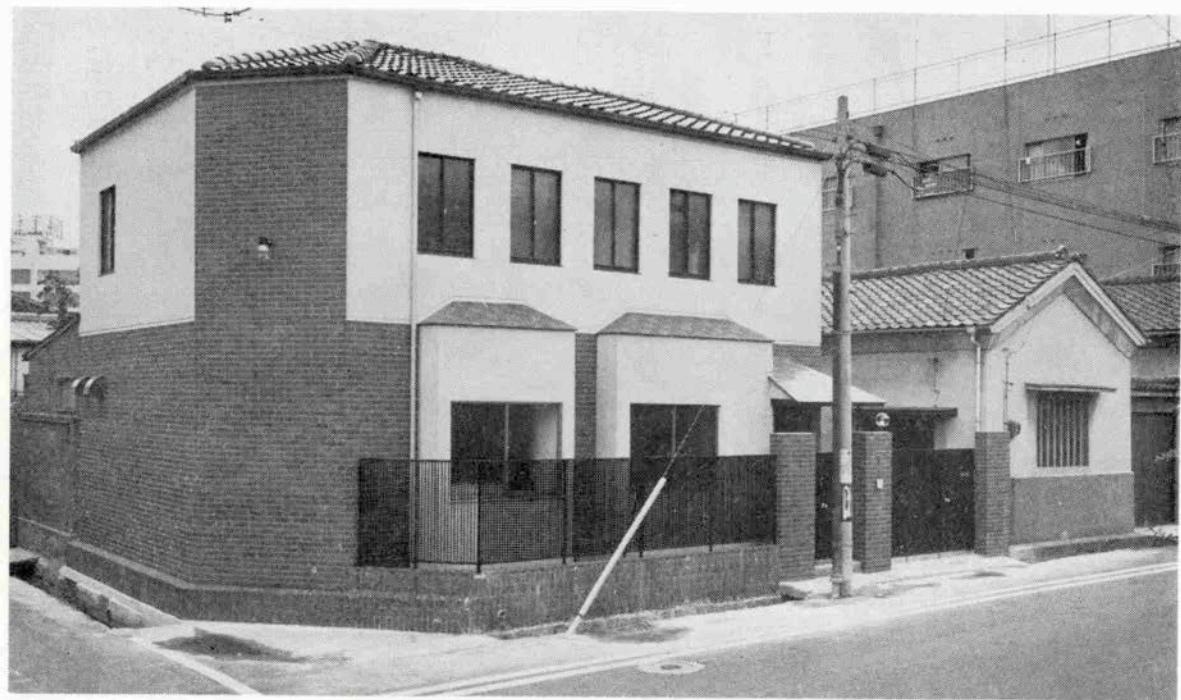
ません。ここには本物の倉を持つ強みがあります。厳しい自然と対決して風土と人間の知恵が、つくられた空間と素材が織りなす本物の味があります。それは現在生きている大方の人々にとって、もはや得がたい味になってしまいました。このような場を持つ幸をうらやましく思うし、可能なかぎり残して生きづづけさせていることを見るのはうれしいことです。しかしそれは同じものを現在にお



アトリエのそばにある応接間で話す
石阪春生画伯と高月さん

いて造ることとは全く次元のちがう事です。建てものを建て自らそこにすまいし、仕事し、物を納めることでしよう。新しい空間のとりあいには、現代の、未来に通じる風土と人間の知恵を最大限に集めたものになってくるのは当然のことでしょう。新しい空間のとりあい、新しい素材の扱い方、新しい技術、性能材、ただ新しいということが、人間性不在の建物、すまいうふうにつながりかねない現代の建築家の多くの作品は、新

しい可能性に対するたえまない人間の努力や挑戦とは別のものだという弁解があまり力強くないのは、ある意味での反省の必要を私自身の周りにも認めるからです。それは過性のモノでなく、時間と空間の経緯に耐えて、本物の味を伝えられるモノをつくり出したいという思いが、最近のオーナーの、すまいや暮し方に対するパックボーンのなさにある面では屈しつぶなりわっている事のもどかしさを含めて画家であるあるじの言葉を伝えさせられる面があるからです。そしてあるじ自ら指揮をとつて造りあげた新しいすまいも種々な矛盾をはらんで出来あがつたように思います。内部は拝見しておらずませんが、やはり、アルミサッシ、鉄柵、タイル貼 etc.、そこに本物の味を御存知の作者にして新しい素材や技術との出会いへのもどかしさが見られます。恐らくこのすまいは、時間を追つてつけ足され、あるいは削られ変化していくことでしょう。そして、すまいがすまい手の心や暮しの表現そのものとなつてゆくプロセス多くの素晴らしい会話があるじ自身の内部で、共にすまいする家族と、又訪れる人々との間で展開されてゆくとしたら、それはそれで楽しむことだ。



上：石阪邸全景

アトリエとサロンの外観 天井の梁が歴史を忍ばせる倉庫を改造したアトリエ

アトリエにつづくサロン

応接間は 緑の多い庭

渡辺邸を訪ねて

朝からの雨が上った秋の午後である。市バス三宮——阪急六甲路線の停留所、野崎通五丁目から小さな坂道を上つてゆく。

このあたり、布引から東へ、青谷、篠原にかけては、細くて長い坂道がとても多い。その坂道の頂上からぶり返つて見下ろすと、坂の両側にぎっしりと並んだ建物の間にさまれた一直線の狭い視野の一一番奥に海が見つかる。よく神戸の街は海と山とにはさまれてと表現されるが、この眺めからもまさにその通りであると感じさせられる。また逆に海と山との距離が意外に長いような気もしてくるので不思議である。この坂道（バス停からわずか二百メートルぐらいであるが、ちょっととした運動になる）を登つたつきあたりを右に曲つたところにあるのがこの渡辺邸。

立派な門構えにつづく石段を登つたとたん、午後の光に輝く芝生が目に入る。緑一面の柔かいじゅ

うたんのようである。住宅が雑然と密集したこの付近にあって一段高くなった渡辺邸からは隣近所の空氣は隔絶されて全く感じられない。渡辺さんは「私の家の応接間はいつもこの庭なんです」とにこやかに語る。庭のテーブルに、あるいは芝生の上にじかに座つて来る客に接するそうであるが、この日は雨模様のために庭で談じることができない。不運なことだと残念に思いながら靴を脱ぐ。



応接間で渡辺さんご夫妻

渡辺邸の主である渡辺利雄さんは洋服の紳士渡辺の会長。多忙の人。日本近代洋服発祥の地神戸にあって日本の洋服界での貢献者。昨年10月、神戸東遊園地に完成した「日本近代洋服発祥の地顕彰碑」（環境造形Q制作）の建立に尽力された人でもある。通された応接間に小さな札がかけられてある。「九時終業。十時就寝」。渡辺さんの健康法のひとつだそうである。早く寝る。早く起きる。朝

には裏の畑に出かけ、土に触れる。いろんな野菜が栽培されている。「イノシシが荒して困る」そうである。

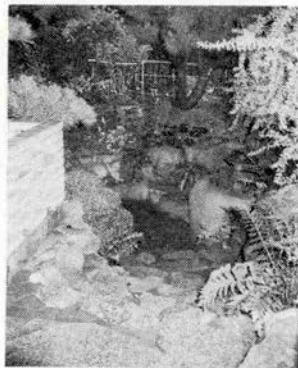
応接間。さつきの緑の芝生の庭に接している。

改めて庭を眺めてみると、端にデッカイ楠の木が茂る。雄大である。手前には一日のうちに何回も花の色が変化する醉芙蓉。海からの秋風がそんな緑の中を吹きぬけてくる。涼しい風。日が暮れるのが早い。この応接間から庭ごとに、神戸の街、港に行き交う船に灯がともるのがよくわかる。貿易センタービルにも灯がついた。何ともいえない神戸の味である。全く飽きない。

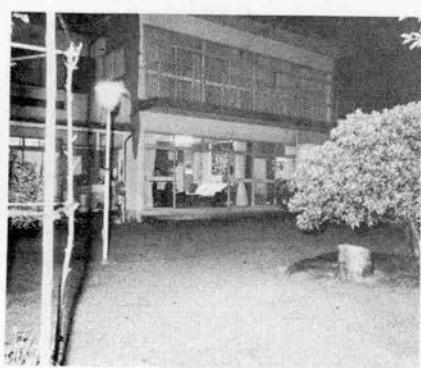
坂道を上つたところの門構え、そして石段から玄関。素晴らしい庭と応接間。それだけしか拝見していないが、充分。静岡出身の渡辺さんがフトしたきつかけで神戸に移り住んで永い。神戸で生れ育つた生粋ではないかもしれないが、渡辺さんのように自然を愛し、人間を愛し、神戸のためになることなら喜こんで行動する人、神戸でのこのような暮しをする人が本当の神戸っ子であるような気がしてならない。



白い壁と緑が美しい渡辺邸全景



門からのアプローチ



庭から見た居間



手入れのゆき届いた広い庭

マンションに住む

O邸を訪ねて

コンクリートづくりのたてものとえばオフィス街のビル、その特に夜景など人の気配のない一般的な螢光灯のあかりが、都会の夜を感じさせてくれるなら、同じコンクリートづくりのマンションや団地から、もれる光が赤や黄、青と各戸いろいろ違う光（何のことはないカーテンが色々違うから見えるだけなのだが）で、そこに人の住む場所を感じさせてくれ、私などいつもホッとする。さしずめOさん宅からはオレンジ色の光が外から見えるのではないか……そんな思いのする快い住まいだ。

商社勤務のご主人の関係で十年あまりのニューヨーク暮らし。そして日本へ帰つて来てこのマンションへ。「最初は狭くて狭くて……でも庭いじりからは解放されしたけど……」と話してくださる奥さん。マンションなど外観は画一だが、中のインテリアでいい分、

一軒一軒のイメージが違つてくる。Oさん宅は、コンクリートの柱の厚みにピッタリ合わせた作り付けの食器棚や、本棚、収納用に充分大きさと厚さをとったタンス。壁にアクセントと実用を兼ねた電話台と、作りつけの家具が多く、生活の知恵を充分に生かしたインテリアで狭さを感じさせてくれない。それ以上に、これらのチーク材の何げないけど味のある茶色と、食卓の上のベンダントの赤。クッションのオレンジの縞と

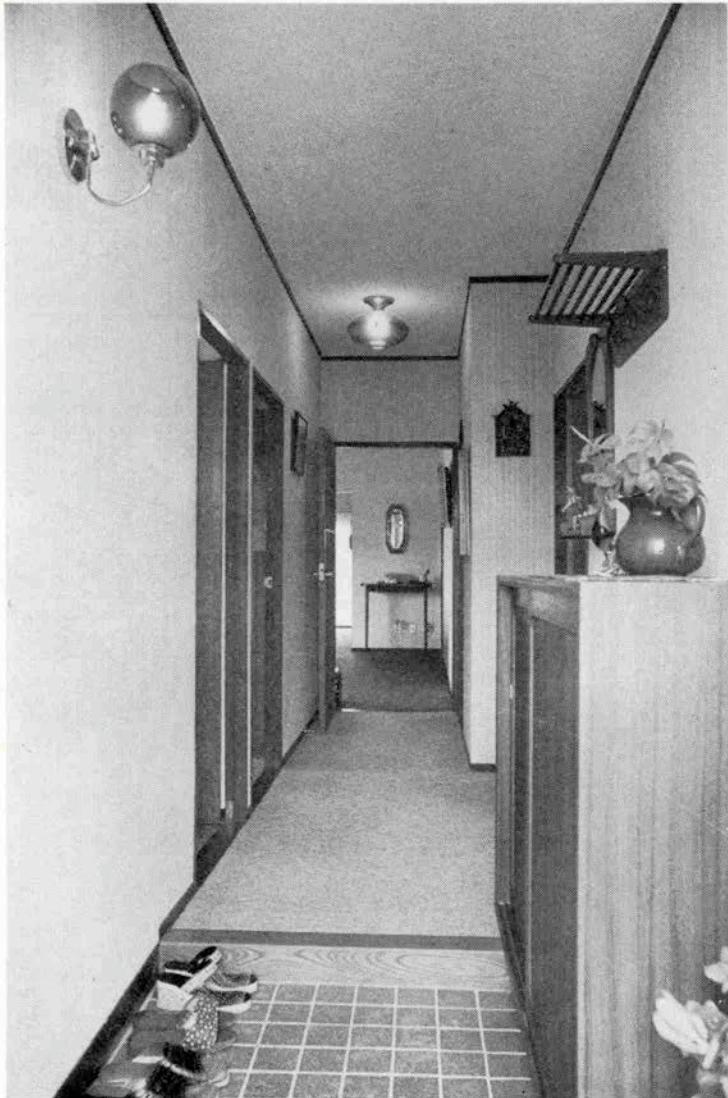


居間はダイニングルームとつづいてワンルームのようになっている

ニュージーランド製のオレンジがかつたループのカーペットというよう、ご家族のセンスで選んだインテリアの、カラーコーディネイトのみごとさに感心させられる。「このマンションはベランダに物を干してはいけないって協定があるんです。住む人の協力で団地のスマート化なんて言われますけど

つて。この隣の方には億のつくマンションでなくオクションがあるんですよ。」なる程、窓からは、あちこちにマンションが建っているのがよく見える。O邸は6階なので非常に見晴らしもよい。丁度コーナーにあたるのでベランダがコの字型に付いており、よけい広く感じさせてくれる。

ご主人のお勤めの関係で外人のお客様も多く、「でもニューヨーク時代は夫婦同伴」というのが多くて大変でしたけど、このごろは鍵一つかけると安心な生活なのでついサボってしまつて……とおっしゃるが、アメリカで生まれ、今はもう中学生というお嬢さんともども、カーベンターズの大ファンというからとてもお若い。家族は他に、大学生の息子さんとの四人。子供部屋はそれぞれの趣味を生かして、息子さんの部屋はブルー系でクールに。お嬢さんの部屋はスヌーピー調に。和室と台所と納戸と……狭い狭いとおっしゃるが、部屋数も多く、これでは掃除も大変そう。「そうなんですよ。主婦業というのも忙しく、掃除もやり出すとずい分、時間がかかるのでね」お料理もお得意な奥さま。この奥さまの印象がまたオレンジのように明るくステキでし



これも、つくりつけの電話台



ベランダが広く、見はらしもいい



左：玄関から奥をみる

台所から居間をのぞく

住まいの一〇番

〈チェックポイント〉

人もすまいも「かつさえかつむすぶ」うたかたのようなものとす

規制について担当しています。

る鴨長明の『方丈記』をひっぱりだすまでもなく、住居についてはとりあげ方が古来日本人の住居観の底につよく流れていきました。

しかし時は流れうたかたの住ま

いではなく世はマイホーム時代。

よい環境に、よりよい住宅を建てたいと願うのは誰も同じでしょ。これから住宅を建てようとしている人のために、見落としてはならないチェックポイントをあげてみました。

まず、どんな住宅を建てたいか団らんを中心とした生活のための家を、いや合理的な家を、と目的はさまざまですが、基本的なチェックポイントは同じはず。予算に合わせ、よりよいKOBE LIFEを楽しんでください。

土地

持ち主を調べる。↓法務局正しく造成、又は区画表示された土地か? 聞き合せ、図面を見る。業者登録だけでは危険です。宅地の場合、市役所の都市計画課へ問い合わせる。

市役所 都市計画課は土地利用、計画道路などを担当。

建築課は土木、宅地などの

建物について

設計事務所→県に事務所として登録するものに依頼する。市役所 建築審査課へ確認申請すること。

②見積

施工業者も業者登録している所へ。見積単価→建築物価標を見当づける。

③建築

市又は県の建築指導課に相談する。必ず施工業者と利害関係のない人に頼む。工事の管理は一級又は二級建築士に。

建築についての相談窓口は市や県の他に次のところがあります。

- ①神戸市住宅相談
- ②神戸市整備公社
- ③住友信託銀行すまいの設計室

- ④新聞会館ハウジングセンター
- ⑤松下電工
- ⑥各デパート(大丸、そごう、三越など)

- ⑦星電社などへ

インテリア相談は

- 各デパート
- 家具屋さん
- 各インテリアショップで。

住まいの一〇番

ご存知ですか
便利な施設があります

■神戸市民生活協同組合「生活改善事業課」

神戸市生田区江戸町98

市民生協会館一階

電話三九一四四五五四

午前九時から午後五時まで

楽しい家庭づくりは明るい住まいからをキヤツチフレーズに、

神戸市民生協（通称市民生協）に「生活改善事業課」というのがあります。

この課ができるて10年。最初は便利大工程度のものから始まつたのが、今では新築・増・改築とマイホームづくりまでやっている。年に取り扱う件数は、大小とりませて約四〇〇件。

台風シーズンには、雨戸の修理や雨もりの修理が大変なにぎわいをみせる。そうだが、電話一本で、相談や下見に来てくれ、仕事の大問題わざ動いてくれるのがここの大特長といえる。

今は不景気だけに、新築よりも

増・改築の申し込みが多いそうだ

が、まず電話（あるいは直接窓口

まで相談に行くと）取り引き業者三社が見積もりを出し、依頼者との

合意の上で工事に取りかかるシステム。

「ころばぬ先のつえ」大切なマイホームを今のうちに治療しておこうという場合や壁や塀の修理、改善など小さい工事から、みどりのある生活、垣根を造ること、樹木の葉刈り、芝生の手入れ、庭全体の造成まで引き受けてくれる。

また経済面のサービスとして、便利な貸付金制度があり、工事費の50%（最高50万円まで）無担保融資もしてくれます。ただし、市民生協だけに、利用者は会員、市内に居住の人、市内に勤務先を持つ人に限られます。見積調査料は千円。

市民生協はこの「生活改善事業課」の他に結婚式場や色んな部門があるが、この「生活」のスタッフは三人。「この部門があることを知らない方が多いんじゃないかな?」と思うんですよ。毎日の生活で不便を感じることやら、ちょっと手を加えたらまだなんていふことが多いと思います。そんな時のために最初は便利大工みたいなものから出発したんですから、どんな小さなことでも相談してほしいですね」となかなか意欲的だ。

『ハイ、ヒヤクトウバン』といふ電話番号を持つこの兵庫県営繕はその名もズバリ、住まいの一〇番。ここも市民生協と同様に、電

話一本で用が済みます。取り扱う工事も、雨もり、瓦、トタン、樋、ベランダ、屋上、内外壁、風呂、台所の修理から造園、店舗の改装、増改築、注文建築、新築と、住まいの修理全般から家の建築まで。

兵庫県営繕建築協同組合なんてもつかしい名前がついているけど工務店や大工さん、左官さんの組合のこと、この事務所はその窓口になつていています。

電話で受けた用件を、それに適した組合員に巡し、設計、見積り施工という手順になる。申し込みは月に一〇〇件余り。だいたい大小とりませて施工する工事は月に六〇件ほどという盛況ぶり。電話での相談にも応じており、ちょっとした「畳の焼けこげ」台所のカビとりなどの暮らしの知識のアドバイスもしてくれる。増・改築工事は完工後一年、防水工事は十年の保証があり、見積りは無料とのこと。また姫路にも支部があり（姫路市豊沢町89番地）、電話（〇七九二）八五三二八一）地域によつて仕事を分けている。大工さんや左官さんのよく出入りする事務所らしく、入口にいくつものヘルメットがかけであるのが印象的だ。

■兵庫県営繕建築協同組合

神戸市東灘区住吉町中島四三九の五
電話八一一一〇一〇一〇・八一一一六七一